

台湾濁水溪北岸における製糖工場の建設と地域開発

正会員 ○辻原 万規彦* 正会員 青井 哲人**
同 恩田 重直***台湾日日新報 台湾百年歴史地図 台湾総督府報
原料採取区域 改良糖廊 軽便鉄道

1. はじめに

筆者らは、台湾西部を流れる濁水溪の流域をひとつの構造をもつ領域世界と捉える視角から、台湾都市集落史研究を再構築する研究プロジェクトを進めている。

本稿では、明治30年代後半から大正初期の濁水溪北岸(図1)を対象に、清朝統治下から日本統治下へ移行する時期における製糖業と地域の開発との関係を検討する。検討には、台湾日日新報の記事、台湾百年歴史地図(中央研究院GIS専題中心)に収録された各種地図、台湾総督府報(国史館台湾文献館館蔵史料查詢系統)、糖務年報、台湾糖業統計ほかの各種文献を用いた。あわせて、2009年以来実施してきた現地調査の結果も用いた。

2. 製糖工場と原料採取区域

日本統治期以前から台湾各地でみられた「旧式糖廊」では、機械を使わず、糖蜜を含む含蜜糖を製造した。日本統治期に入ると、甘蔗の圧搾のみに機械を用いた「改良糖廊」が出現し、さらに、糖蜜を分離して精製した分蜜糖を製造する新式製糖工場が建設された。製糖業では、甘蔗を栽培するための農地と、伐採した甘蔗を工場へ搬入し、製品を搬出する各種軌道のネットワークが必要である。そのため、周辺地域の開発へ与える影響が大きい¹⁾。

当時の台湾では、特定の地域で栽培した甘蔗は、特定の工場に納入することが決められていた。「原料採取区域」制度と呼ばれ、明治38年6月に公布された台湾総督府令第38号「製糖場取締規則」で示された。つまり、原料採取区域の設定と地域の開発は密接に関係していた。

3. 濁水溪北岸における原料採取区域の変遷と地域開発

①最初の原料採取区域の設定(明治38年頃, 図1)

明治38年10月に、林慶岐ほか17名に溪州庄での、簡茂林ほか6名に中寮庄での、工場設置と原料採取区域の設定が許可された。濁水溪北岸の北方と南方にそれぞれ1箇所ずつ改良糖廊が設置され、北斗林家の林慶岐らは北斗製糖を設立した。11月には、黄茂盛に烏溪北岸の大肚庄での工場設置と原料採取区域の設定が許可された。彰化・鹿港間には、既に手押し台車軌道が開通していた。

②台湾資本の旧濁水溪流域の開発(明治40年頃, 図2)

明治40年11月までには、濁水溪北岸における改良糖廊による原料採取区域の許可がほぼ出揃う。旧濁水溪の南岸に、前述の北斗製糖(工場:溪州庄)と陳梓成(工

場:大排沙庄)、旧濁水溪の北岸に、ペイン商会(工場:北斗庄)、蔡春海(工場:頂寮庄)、鹿港辜家の辜顯榮(工場:南勢埔庄、後に三省庄)である。旧濁水溪周辺の土地の開墾を進めるために、改良糖廊による原料採取区域が設定されたと考えられる。明治41年には、田中央・北斗間の軽便鉄道が敷設されたが、1年で撤退した。

③再編成期(明治42年頃, 図3)

明治42年7月に、「台湾五大家族」の一つである板橋林家による林本源製糖に広大な原料採取区域が許可された。溪州庄での工場の建設に着手後、製糖開始までに時間がかかるため、改良糖廊の原料採取区域も併存した。新式製糖工場の建設と農地やインフラの整備による地域開発の前の段階、つまり、改良糖廊によって原料採取区域が細分化された小規模な地域開発の段階と言える。

陳梓成の原料採取区域が縮小され、辜顯榮に旧濁水溪南岸の連交厝庄での改良糖廊の設置と原料採取区域の設定が許可された。後に新高製糖彰化工場の原料採取区域が設定される地域にも、明治42年8月に、楊吉臣ほか2名(工場:馬鳴山庄、後に溝墘庄)と張舜臣(工場:溪底庄)の改良糖廊と原料採取区域の設定が許可された。濁水溪北岸一帯で、甘蔗収集用だけではなく、旅客と貨物用の手押し台車軌道網が形成されていたと考えられる。

④台湾資本中心の濁水溪北岸一帯の開発(明治44年頃)

明治43年3月に、大倉財閥による新高製糖彰化工場(中寮庄)の原料採取区域の設定が許可され、林本源製糖と共に、明治43/44年期から製糖を開始した。また、林本源製糖の原料採取区域内には、明治43年8月に愛久澤直哉を起業者として改良糖廊と原料採取区域の設定が許可された。蔡春海と陳梓成の原料採取区域を辜顯榮が継承し、北斗製糖やペイン商会の原料採取区域は取り扱われた。一般の乗客や貨物も運搬できる軽便鉄道の営業線の整備が進み、軽便鉄道と手押し台車軌道の網の目のようなネットワークが張り巡らされ始めたと考えられる。

⑤台湾資本から日本資本への移行(大正期以降, 図4)

辜顯榮が経営する改良糖廊と原料採取区域は、大和製糖から新式製糖工場である明治製糖溪湖工場へと引き継がれ、員林・溪湖・鹿港、溪湖・二林の軽便鉄道を開通させ、大正10年に製糖を開始した。さらに昭和2年には、林本源製糖も鹽水港製糖に買収され、濁水溪北岸は、日

本資本による新式製糖工場と原料採取区域で占められた。

4. おわりに

濁水溪北岸では、まず、台湾資本による小規模な改良糖廬と原料採取区域の設定によって工場周辺の農地が開墾され、海運と徒歩から、手押し台車軌道による交通網に変容した。さらに、日本資本によって大規模な新式製糖工場が建設され、広大な原料採取区を設定して、奨励政策によって農地開発を進め、軽便鉄道の営業線と専用

線の交通網が形成された。こうして、清代の地域開発の枠組みは、日本統治期の産業（＝製糖業）による地域開発の枠組みへと移行したと言える。

謝辞 本稿は、JSPS 科研費 JP26420647, JP17K06754 ならびに JP15H04109 の助成を受けた成果の一部である。史料の閲覧には、台湾中央研究院 GIS 専題中心の廖法銘先生、公益社団法人糖業協会にお世話になった。

参考文献・注：

- 1) 辻原, 今村: 戦前期の沖縄における製糖工場とその建設が地域に与えた影響, 日本建築学会計画系論文集, 第 737 号, pp. 1859~1869, 2017. 7

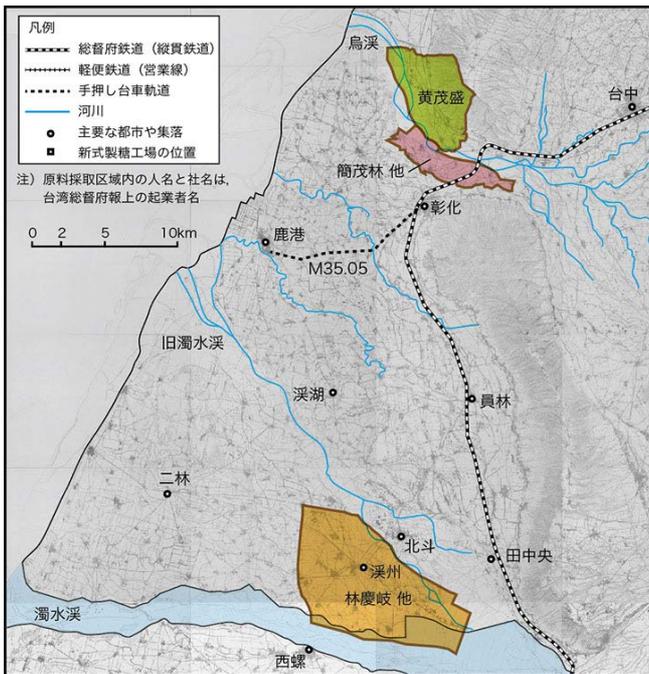


図1 明治 38 (1905) 年 11 月の原料採取区域と軌道

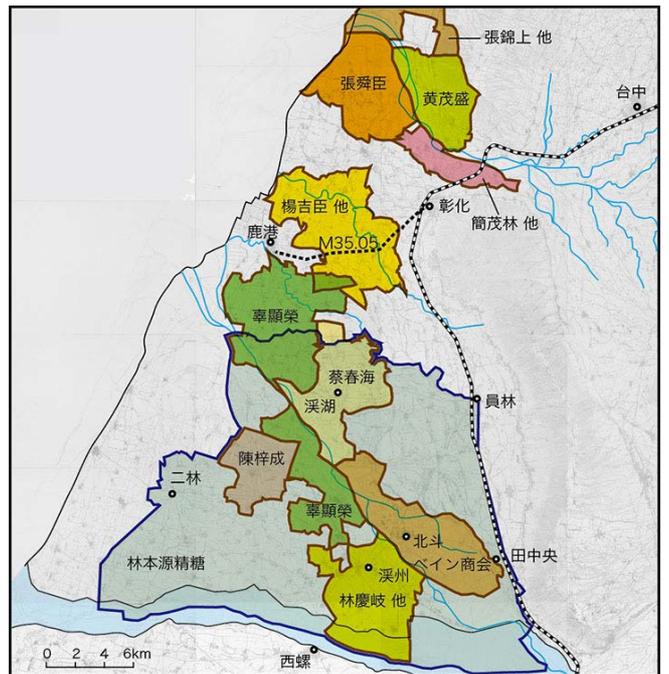


図3 明治 42 (1909) 年 08 月の原料採取区域と軌道

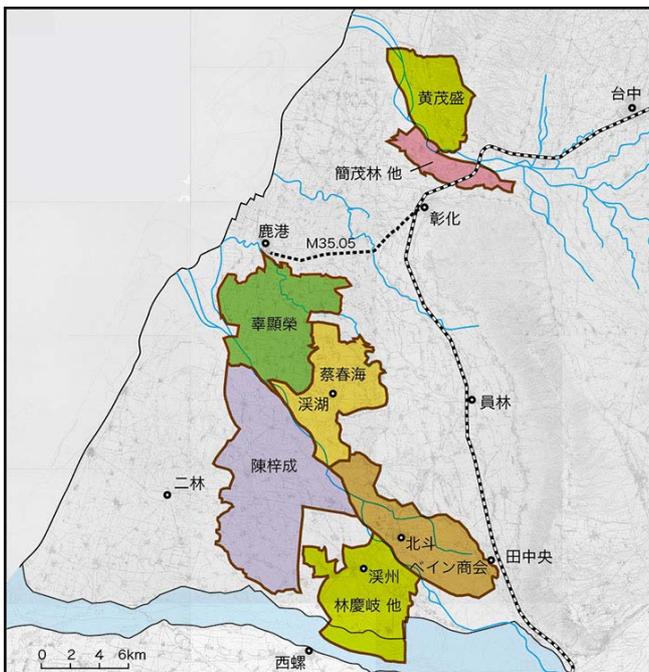


図2 明治 40 (1907) 年 11 月の原料採取区域と軌道

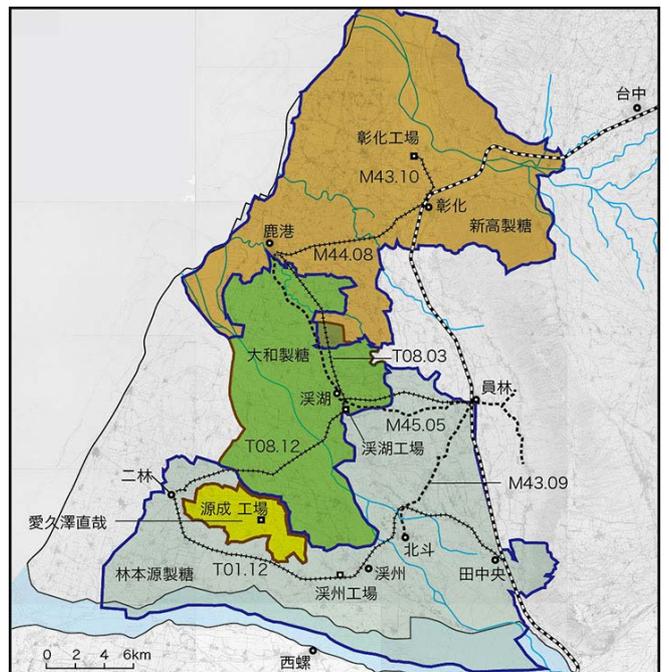


図4 大正 08 (1919) 年 12 月の原料採取区域と軌道

* 熊本県立大学環境共生学部居住環境学専攻 教授・博士 (工学)
 ** 明治大学理工学部建築学科 教授・博士 (工学)
 *** 法政大学エコ地域デザイン研究センター 研究員・博士 (工学)

* Prof., Prefectural University of Kumamoto, Dr. Eng.
 ** Prof., Meiji University, Dr. Eng.
 *** Researcher, Hosei University, Dr. Eng.